

選択を期待するのである。

「うちの生徒たちは、「この学校の先生は、しつこい」と言っています。叱ってくれば一瞬で済みますが、本校ではなぜ自分がそうしたか、ということに面と向き合わざるを得ないので、その場だけやり過ごせばいい、ということにならないですからね」（小島副校長）という。

このような独特な指導方法を実践するために教職員は、日々研修や講習会で技術の研鑽を積んでいる。さらに注目すべきは、「生徒との信頼関係づくり」のためには全校一律の指導方針が重要という考えの下、「教職員行動綱領」が掲げられている点だ。「私たちは、一人ひとりの生徒を尊敬することで、生徒との温かい人間関係づくりを目指します」「私たちは、生徒どうし、教職員どうしの協働・共生のもと、生徒に質の高い学びを提供します」などの7項目からなる。

これは開校準備期間中に生徒の授業心得を構想した際、一緒に教職員用もつく

り横に並べたらどうかという考えからつくられたものだ。現に校長室にはもちろん、各教室前面など校内の至る所に貼られている。トップダウンではなく、皆でアイデアを出しながら共同作業でつくり上げたこともあって、教職員に思い入れも生じ、皆が率先して守ろうという意識につながっている。また、世間に対するアピール・公約という側面と共に生徒には安心感をもたらす効果もある。

ただし、こうしたこれまであまり例のない生徒対応が、初年度から理想通りにうまく機能するはずもなく、教職員が何故こうした対応をしているのか、教職員自らが常に原点を忘れずにいるということと、自分たちの方法論を、自信を持って生徒や保護者、地域の人たちに自らの言葉で語れて初めて徐々に効果が表れてくる、と考えているようだ。

したがって伊藤校長も「学校づくりはまず組織づくりから。教職員間の人間関係がつかれなくて、生徒との関係づくり

などできない」と語るように、相模向陽館高校の職場の雰囲気はとても温かい。

さらに、生徒自身にも心理学的な手法に興味を持って実践してもらおう授業も考えられている。夏季休業中には希望者を対象に、既にピア・カウンセリングについての講座が行われている。さらに保護者にもぜひそういった知識・技術も身につけてほしいという観点から、保護者参加の講習も企画・実施されている。

全員参加で生徒を 応援する体制

生徒たちの心に向けて細かく対応するためには、学校内のマンパワーだけでは不十分なことは明らかだ。そこで当然なこととして学校外の人々との連携協力が志向されることになる。最近ではもちろん多くの高校で学校外の機関・団体との連携活動が進められているが、それとは一味も二味も違うのが、同校の「チーム向陽館」構想だ。

これはサッカーの試合に例えると分かりやすいという。生徒はもちろん学校に関わる様々な人々「学校支援ボランティア」「保護者による応援組織」「学校評議員」などが単にスタンドから応援するだけでなく、あくまで生徒と共にフィールドプレーヤーとなつて一緒にゲームに参加するという形をとるのだ。そしてサッカーの試合でも重要な役割を果たす「ベンチワーク」は、教職員だけでなく先ほど挙げたすべての人たちが、あるいは局面に応じてはこちらにも生徒が入り、協働・共創により皆の力でものごとに取り組む、というものだ。

さらにホームページを見て、向陽館の理念・目指すところに共感して学校を訪問する人々もおり、その中で数名の方がメンバー入りして活躍しているという。こうしたボランティアの人々には、まずは学校の様子を見てもらう。それで自主的に自分でできそうなことを見つけてもらい、それを実現してもらう、という自発性を尊重しているという。

20世紀の常識にとらわれない学校を

統廃合になつた県立高校の校舎をそのまま利用しているため、現在では1年生のみで各教室やテニスコート、体育館等の施設を、ゆつたりと使っている。校舎内を見て回ると、記録的な猛暑が残つた9月初旬、クーラーのない教室は窓を全開にしても熱気がこもっていた。大半の生徒が第一志望として入学してきたというが、不登校・引きこもりだった子どもにとって、毎日学校に通うのは

実際問題として非常に労力のいることで、4・5月は何とか通えた生徒でも、半年ほどが経過した9月の時期には残念ながら小休止状態になってしまっている者もいるという。しかし、こまわり祭りに参加して、保護者やボランティアの力を借りながら出店や催し物を披露したりすることが、入学後わずか3カ月ほどでできるようになつたという事実は、一つの大きな成果と言えないだろうか。

相模向陽館独自の手法は伊藤校長の手腕によるところが大きい。従来の学校観や教員独特の考え方にとらわれない、非常に自由な発想は、月平均3回以上のペースでホームページで配信されている、校長コラム「片言自在」からもうかがえる。

例えば「外から人々がどんどん入ってきてほしい」「生徒たちが本当の意味でコミュニケーション力を身につけたり、良好な人間関係を築く力をつけたりするためには、目的志向で集う老若男女が当

たり前のように入力する、プラットフォームのようなキャンパスが理想的」といった言葉は、なかなかこれまでの常識に縛られた先生方には思い浮かばない発想かもしれない。

また、伊藤校長の経営者としての手腕にも注目したい。単年度計画と共に作成・公表された平成26年度までの「中期経営計画」には、段階を追ってかなり詳細な内容が定められている。これは、個々の学校のミッションは不易流行の不易に当たるもので、校長の異動等により大きく変わるものでも、変えられるものでもないはず、という強い信念の表れでもある。

現時点での課題は二つ。一つはやはり生徒対応である。時間をかけて対応したいが、単位修得という高校における修学のシステム上、残念ながら現実にはそれほど待つ時間をとれないこともあり、何とか優先順位をつけてできるところから

今は取り組んでいるところだという。

もう一つは、スタッフの発掘と確保。学校規模の膨らみと反比例して開校当初の勢いが衰えていくことが懸念される。しかし「これからは新たな公共のあり方の視点で、プロの教師と専門性を有する市民との共創による学校づくりを展開して行くことが必要」と、冷静に語る伊藤校長には、既に課題解決に向けた腹案あり、と思わせるしたたかさを感じた。

神奈川県は今、不登校・いじめ・暴力行為の発生件数が毎年高い水準にある、という事態に直面している。そんななかにあつて「世の中には外見や一時的な言動によって他者を排斥する風潮が依然として根強い。でも良好な人間関係を望まない者はいないし、関係を築くことができれば、自ずと自分を高めたいという欲求が誰にでもふつふつと湧いてくるはず

では、21世紀を担う子どもたちには、従来の、いわば20世紀型の学校教育はもは

や古く、真の人材育成はできないのではないだろうか。彼ら彼女らのニーズに合った学校のあり方として、我々は、クオリティ・スクールを目指しているのです」と語る伊藤校長の言葉には、神奈川県で全国の人々を驚かせる、新しいチャレンジへの意欲・力強さを感じた。

(注1) 選択理論…米国の精神科医ウィリアム・グ
ラッサー博士が提唱する、幸せな人間関係を築くための心理学、方法論。

(注2) クオリティ・スクール…選択理論を学校教育に適用したもの。強制が排除された学習環境にあつて、学習効果が着実に上がり、生徒も保護者も教職員も、学校が学ぶ喜びに満ちた場であるとの認識が持てる学校。

「学校所在地」

〒252-0003 神奈川県座間市ひばりが丘3丁

目58-1

TEL 046-298-3455

FAX 046-298-3458